「今世紀を生きる」

――聞き書きテープより

岡田孝子

今、書斎の机の上には一二〇分テープがうず高く積み上げられている。昨年から今年にかけ東京女性財団の助成を受けて「聞き書き・昭和を生きた女性たち――『女人芸術』の人々」をまとめたのだが、そのときの聞き取りのテープである。

それぞれのテープには日付と名前を記したシールが貼られている。一、二と番号がふられているのは、その日の聞き取りが二時間で終わらなかったためだ。私を相手に日が暮れるのも忘れて長時間、語って下さったそのときの情景が、ありありと蘇ってくる。

この聞き書きでは三人の女性たちを取り上げた。望月百合子、平林英子、松田解子。ともに昭和の初期、劇作家長谷川時雨によって創刊された文芸誌『女人芸術』を活躍舞台として文学に、思想に自らの生をぶつけてきた人々である。

一九二五（大正一四）年治安維持法が公布され、思想弾圧の嵐が日本中を荒れ狂う。三・一五事件が起こり、一九三三（昭和八）年には小林多喜二が虐殺され、多くの作家たちが獄窓につながれた。それから敗戦までの時代、人一倍、自由を求めて権力に向き合ってきた人たちにとって、それはどんなにつらい日々であったろう。書くことも話すことも不自由だったあの時代を、彼女たち自身の口から生の言葉で聞きたいという欲求が、私をこの聞き書きに駆り立てたのだった。

三人三様、生き方も思想も違う女性たちだが、九〇歳を越えて今なお元気に現役で活動している。たとえば、望月百合子。彼女は今世紀の幕開け一九〇〇年（明治三二）生まれであるから今年九七歳になる。かつてのアナーキズムの闘士も今は穏やかな笑顔で、それでも見果てぬ夢を私相手に語りつづける。楽しげに、ときにため息まじりに。

「私たちが目指した人類平和ね、一人一人が個人の自覚をもって、お互いに尊重しあって生きる社会――。そんな社会は一〇〇年たっても二〇〇年たっても来ないかもしれないわね。だけどね、私、それでもいいと思うの。夢を見続けて生きていきたいんですよ」

読売新聞記者、ソルボンヌ大学留学と、当時としては実に伸びやかに我が道を歩んでき

たが、彼女を一躍有名にしたのは、大正末、都新聞紙上で繰り広げられた蔵原惟人とのアナボル論争だった。そして『女人芸術』創刊号では評論「婦人解放の道」を執筆し、山川菊栄、神近市子とともに巻頭を飾る。しかし軍国主義の抬頭で悪戦苦闘、やがて活路を求めて旧満州へ渡る。ジャーナリストとして活躍するかたわら女性教育にも携わるが、敗戦。戦後日本の急激な変貌は、彼女に失望を与え、沈黙の時が流れていく。テープには、その間の彼女の失意の日々、〝侵略地〟であった旧満州への偽らざる思いも、収められている。

平林英子は一九〇二年生まれの九五歳。九五年に長年連れ添った夫・中谷孝雄を亡くし、今は彼の主宰していた俳句誌『鈴』を継承。真杉静枝、大田洋子など彼女と親しかった作家たちを回想する「古い手紙から」を連載している。

若き日に武者小路実篤に傾倒、その理想主義と文学への熱に燃えて日向の「新しき村」で過ごしたこともある。また「新しき村」へ行く前には三高の学生だった中谷孝雄と一時期〝ままごと〟のような同棲をするが、このとき梶井基次郎ら、後の『青空』同人たちとの交流を持つ。作家を夢見、文学論を戦わす若者たち。家の没落からろくに教育を受ける機会のなかった彼女にとって、彼等と過ごした日々が勉強の場、文学修行の場であったという。やがて二人が所帯をもった本郷菊坂町の二階で『青空』は産声を上げる。

「梶井さんや外村繁さんたちが毎日のように来ましてね、同人誌出す相談してるんですよ。で、その名前がどうしても決まらないの。そんなとき、ふっと『青空』という名前が浮かんできたんですよ。それで『青空』。ええ、ですから私が名付け親なの」

さらに太宰治や檀一雄ら『日本浪曼派』の作家たちとの思い出など、まるで文壇史をひもとくような心躍る聞き取りだった。

そして松田解子。一九〇五年生まれ。九二歳になる。私の肩にも届かない小さな体、その体いっぱいにみなぎるエネルギーで、精力的に書き続けている。

秋田の銅山の貧しい鉱夫の娘として生まれ、日本の資本主義発展のなかで徹底的に搾取される側として育った。その生い立ちが彼女の生きる根幹となり、常に労働者、差別される者の立場からの視点を持つ。平和を希求し、闘う姿勢は今も変わらない。

この二十世紀を、今世紀そのものを生きてきた女性たち。聞き取りの間、私の心の中に芽生え、ふくらんでいったものは、月並な言葉だが〝生きる〟ということだった。どのように時代を生きるのか、どのような姿勢をもって生きていくのか、ということ。

戦後に生まれた私は、幸いなことにかつてのような飢えも弾圧も知らずに過ごしてきている。平穏無事に今日を過ごし、明日も同じように過ごせると夢にも疑わない。しかし、しかしである。この一、二年、そうしたのんきな私にも世の中の空気がなんとなく険しく感じられることが増えてきた。書店の棚にはやたらと戦前の日本の在り方を肯定するような本が並べられているし、従軍慰安婦の問題にしても、侵略の記述にしても、首をかしげるような論議が盛んに行われている。そして最近の金融破綻は何を暗示するのだろう。昭和初めの大恐慌、戦争への急速な道……。まさかとは思うものの、一抹の不安がよぎる。

その一抹の不安があるからこそよけい、激動の時代をくぐり抜けてきた彼女たちの姿を通して、〝あの時代〟を次世代に伝えたい。

私自身をも含めて〝今日・明日〟を考える時期が今なのだと、机の上のテープは語りかけている。